

槐

かい

岡井省二創刊

平成24年9月号

平成二十四年九月一日発行 第二十二巻第九号 通巻第二五五号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



おいらん草

高橋将夫

片陰をはみ出してゐる己が影
ラムネ玉ころんと心の底へ落つ
護摩壇の火が涼風を呼びにけり
神木を包み込みたる茂りかな

おいらん草愛の形でござりんす
濡れ場では姿を隠す梅雨の月
さりながら男心と冷奴
好き嫌ひなくて達者な金魚売
逝く夏や母の味より妻の味
走馬灯現在にある過去未来
六月の心身濡れてをりにけり

槐安集

水野恒彦

炎天を行く誰もがユダの裔
ろくぐわつの水の眩しき重信忌
三伏や疑ひ深きピカソの目
却初より闇深かりし蟬の穴
螢狩処おとめ女は青の色濃くもどる

延広禎一

空也の口皮剥の口海と空
木洩れ日に金環食と蜘蛛の糸
牡丹吐き綾の鼓の連打かな
釣糸の餌は夜露よ西鶴忌
花葵折ぎに盛らるる唐棣餅はねず



加藤みき

あぶく立つ鰻の池や雲の峰
青魚もほたるも貫ふ空のいろ
一つ葉の一つは風に大揺るる
素謡の終つてゐたり梅雨晴間
傘傾げ胡桃の花の雫浴ぶ

石脇みはる

頂上に点呼してをり御来迎
夏の風ケーブルカーに僧二人
はらからはそれぞれ帰途に夏至の夜
朝夕に薬七粒土用かな
夏涼し川面に石をすべらしぬ

中島陽華

スツペの軽騎兵流れ夜這星
星月夜柩に愛の讃歌かな
逢合の橋の五月雨もんじや焼
葦の間にこぼれし金魚大川へ
宵なりき生きて生き抜く蟾蜍

竹内悦子

ほととぎす机の上の涙かな
羊蹄や血圧計と心電図
菖蒲田に鋤と馬穴と人の影
昼前のからだの下の円座かな
人の忌の揚羽蝶来て止まりけり

東長寺二句

栗栖恵通子

男傘ひろげ空海誕生日
白南風や大日衣紋博多織
父の日のウミウシ嗅いでをりにける
北斎の波が正面サングラス
揺れきしむ螺旋階段我鬼忌かな

大島翠木

うしろより光の礫松の芯
待つことを茅花ながしの闇の中
骨の無い開き鰻や分譲地
鉄線花バイロンハイネ知らずとも
黒揚羽風の便りのやうに来る

雨村敏子

美しきものに数へて茶の若葉
水を弾きし初茄子を奉る
散りながら香りほのかに白牡丹
蛞蝓の銀色の道天神へ
五月雨やけふのひと日をわたくしす

本多俊子

六月や衣の白色こころとす
夏の川風と織りなすファンタジー
いのちなり濡れて紅さす花石榴
精霊は宙にすみたり虹仰ぐ
蟬の穴よりたたかひの音すなり

近藤喜子

夏野きて夜は舟すべるやうに寝る
ひつそりと身の内にある螢沢
水の女神よ華薯な燈心蜻蛉
雹となり龍の鱗のぼらばらと
草いきれ音なき音の満ちてをり

谷村幸子

田にあふれ白蓮ひとつ畦に咲く
どくだみの逆さに吊られ吹かれをり
友と入る薬師の堂や灯の涼し
花つけし太藷の風の湿りをり
水際にゐて散りがての山法師

瀬川公馨

土佐つぼの絵金まつりの命がけ
海芋のリュトンに香水こうずいあふれたる絵金||絵師||金蔵
紐形の栗の花なりよだれリュトン||杯くくり
バンパイアの傘下にゐたり夏芝居
男きて田水の皺を搔き出せり

久保東海司

阿波踊見てみて列に引込まる
新緑や鯉の跳ねたる音重し
朝顔の次の風待つ遊び蔓
逢ひ逢はぬ事も運命さだめや蟻の道
生き方を変へる事なし更衣

西村純太

姫百合の一輪重し織悔室
黒南風や投込寺の荷風の碑
竹林のひかりの海に阿弥陀佛
螢火や泛ぶ過去にはあらねども
声とほく死者の死に倦む桜桃忌

中野京子

七変化骨子一本あればよし
あれかこれかあれもこれもよ七変化
大風も微風も生るる合歡の花
微睡は茅花流しをくぐりをり
しばらくは夕日の休む代田水

柳川 晋

水滴のやうに子守宮落ちにけり
熱のなき光かなしき螢かな
水棲の記憶に出合ふ水眼鏡
えい儘よ鰻の南蛮煮付かな
漬瓜の音を競うてをりにけり

岩下 芳子

仏性を問はれてゐたる蛇蛙
麴を練るゆつくりと息をして
大文字山近々と梅雨あがる
蜘蛛の囿や怒り仏の口の中
シヤールに黴を殖やしてをりにけり



槐市集

竹中一花

天井の龍のうねりや青葉波
緑蔭に神馬の声のゆらぎかな
わらび餅川辺の椅子の固かりき
蝙蝠の洞に真水の落ちし音
鮎釣のずんぐり漢京言葉

田中信行

決断はプランAなり梅雨に入る
妄想と戯れてをり夏の夜
五月晴ニッポンアニッポン佐渡に舞ふ
麦秋や親の介護を旧友も語る
駅前の燕が帰る洋菓子店

谷岡尚美

影をなす大夏木立音楽堂
香を[※]残し泰山木の花終る
てのひらに一瞬のりし夕螢
シユーベルトの楽譜古ぶや花茨
バイエルを祖母とさらふ子原爆忌

寺田すず江

大茄子規格外れと疎まるる
蜘蛛の囀の意地張り通し寂しかり
さざなみと戯る茅花流しかな
いのちかけ呼び合ふてゐる時鳥
ひそやかに人を待ちをり蛩籠



槐集

高橋将夫選

梅雨茸や魔女現はれさうな屋 岡崎 岩月優美子

雹降りて混沌の世を叩きたる

少年の声の真白き今年竹

揚羽蝶夢のはばたき始まりぬ

能面の裏も表も五月闇

花かぼちや馬車になる夢持つてをり 枚方 熊川 暁子

如意棒をひと振りふりて入梅す

水高を増す雷神のパーカッション

みなづきの屈折率を慈しむ

半夏生靴の片方さがしをり

髪洗ふ少女も女の顔となり 岡崎 柴田 靖子

水中花変らぬ色を羨みて

ブロンドの風はこびくるパリ祭

雲空も野山も変はり更衣

老いの身にただ淋しきや誘蛾燈

どくだみの匂ひよくなるまで嗅ぎぬ 高松 十川たかし

立葵まはりの草にかかはらず

まくなぎの本気になりてかかりくる

やはらかな団扇の風をいただきぬ

ふるさとに幾年妻と梅干しき

無碍の世を遊びてをりしこぼれ鷺 岡崎 犬塚李里子

病葉に放下のころろありにけり

老鷺や古墳の森の明るかり

薔薇五月無常の世とは言ふけれど

夕さりて穂麦のひかり目に痛し

馬の目に涼しさ貫ふ賀茂の杜 京都 竹中 一花

ハンモック夢真白なる子の眠り

特牛なだめて夏の野に入りし

半跏思惟弥勒の寺の守宮かな

蝙蝠の空や湯中り鎮まりし

銀河往来

高橋将夫

◇「槐集」 観照

雷降りて混沌の世を叩きたる 岩月優美子
雷が大きな音をたてて屋根や樹木や大地を叩く。その様子を「混沌の世を叩く」と見たところが、作者ならではの視点、切り口。もともと、今を「混沌の世」と感じるのは皆の共通の思いである。

少年の声の真白き今年竹の句の「少年の真白き声」や「揚羽蝶夢のはばたき始まりぬ」の句の「夢のはばたき」もまた作者ならではの感性。

花かぼちや馬車になる夢持つてをり 熊川 暁子
南瓜の馬車はシンデレラの馬車を想起させるが、南瓜がまだ花のうちから馬車になる夢を持つているという発想が愉快である。〈みなづきの屈折率を慈しむ〉の句のまぶしい光の屈折は作者の心の屈折なのである。〈如意棒と入梅の因果関係や〈水嵩を増す雷神のパーカッション〉の句の雷の音とパーカッションの取合せはなんともユーモラスである。

ブロンドの風はこびくるパリ祭 柴田 靖子
パリエヌの金髪が風になびくパリ祭の様子が鮮やかに浮かぶ。

髪洗ふ少女も女の顔となり 〳の句は若さがきらめいており、

雲空も野山も変はり更衣の句には自然の移り変わりがおおらかに詠みこまれている。〈老いの身にただ淋しきや誘蛾灯〉の句では一転して、作者の心の奥を垣間見た思いがした。

立葵まはりの草にかかはらず 十川たかし
たしかに、立葵が真っ直ぐに立っている様は、周囲に係わらない孤高の姿を感じさせる。

一方、〈どくだみの匂ひよくなるまで嗅ぎぬ〉や〈ふるさとに幾年妻と梅干しき〉の句からは作者の人柄というか、人間味が伝わってきて、思わず口元がほころんだ。

病葉に放下のころありにけり 犬塚李里子
放下は心身ともに一切の執着を捨て去ること。病葉は全てをありのままに受け入れようとしているようで、作者の心を代弁しているのかもしれない。〈無礙の世を遊びてをりしこぼれ鷺〉の句のこぼれ鷺や〈薔薇五月無常の世とは言ふけれど〉の句の無常の世に咲く薔薇も印象的である。

ハンモック夢真白なる子の眠り 竹中 一花
子供は純真で、夢まで純白に思える。ハンモックで眠る無邪気な寝顔がかわいい。

椎若葉遠流の山を盛り上ぐる 近藤 紀子
遠流は律令制のもとでは最も重い流罪であった。佐渡が隠岐かどこかは分らないが、遠流の地にも若葉が茂ってエネルギーが横溢しているのだから。

祖父遺愛の陶枕行方知れずなり 〳の句だが、行方不明のその陶枕は案外ひょっこり戻って来るのかもしれない。(以下略)